

アメリカにおける
レクリエーション運動の発展について
——「NRPA CONGRESS & EXPO 2005」への参加を通して——

一 村 小 百 合*

Considering on the Recreation Movements in the United States

——From the case of “NRPA CONGRESS&EXPO 2005” ——

Sayuri Ichimura

要旨：第二次世界大戦後、アメリカから導入され、我が国で展開されてきたレクリエーション活動は社会的な時代背景によってそのあり方を変えてきた。アメリカでのレクリエーション運動の発展には4つの側面が存在している。それは社会改革運動、自然保護運動、商業的な娯楽、健康増進運動である。2005年10月18日から22日の日程でアメリカにおいて、NRPA（全米レクリエーション・公園協会）大会が開催された。そのNRPAの参加を通して、現在のレクリエーション活動の意義について考察していくこととする。

Abstract : After World War II, the recreation movements introduced from the United States and developed in Japan has changed what they should be by the social situation and people's needs of the time. There are four aspects in the recreation movements in the United States. They are 1) the social reform movements, 2) the nature conservation movements, 3) the commercial entertainments, and 4) the health promoting movements. “NRPA CONGRESS&EXPO 2005” was opened from October 18th to 22nd. Through my participation of “NRPA CONGRESS&EXPO 2005”, I considered the recreation activity.

Key words : レクリエーション運動 recreation movement アメリカの生活習慣 life-style in the United States 全米レクリエーション・公園協会 NRPA (National Recreation Park Association)

I はじめに

第二次世界大戦後、アメリカからの強い影響を受けわが国で発展してきたレクリエーション運動は、時代の社会的状況や人々のニーズなどによって、対象やその捉え方などを変化させて

きた。特に戦後、国全体が貧しく、モノがなく、殺伐とした社会のなかで、人々に、心身の健康を増進し、生きるための再創造への希望を託して用いられた“厚生運動”という動きがレクリエーション運動へと発展していくことになる。

*関西福祉科学大学社会福祉学部 講師

“厚生運動”の言葉に秘められた、その当時の、人々が健康で生きていることに感謝し、明日も生きていくためにどのように楽しみを見出すか、そのためのどのような活動や行動をするべきであるか、という思いには、現代の私たちが考える以上に大きな深い意味が込められていたにちがいない。

しかし、当時、わが国では“厚生運動”と、アメリカで盛んに行なわれていたレクリエーション運動とを結びつけたものの、お互いの意味が持つ深刻さや重要性よりも、アメリカ人がレクリエーションの一種として紹介した、歌や踊り、ゲーム、フォークダンスといった活動そのものへの関心が集まることになる。そのため、現代においても、わが国でのレクリエーションの一般的な捉え方は、その当時となら変わりなく歌や踊り、ゲーム、フォークダンスといわれる活動や、スポーツ種目として扱われている部分が大いといえる。

わが国におけるレクリエーション的な意味合いを持つ活動は戦後に始まったわけではなく、古くは、室町時代や安土桃山時代、江戸時代などを語る絵巻や日記といった史料の中で、レクリエーション的な活動の様子や遊具などが映し出されている。能楽や狂言、歌舞伎といわれるわが国固有の伝統芸能から、凧揚げ、コマ回しといった昔遊び、また、お茶やお花など、人々の暮らしの中から生み出されたものとして人々に愛され、身近なものとして行なわれてきたが、時代の流れによる人々のニーズの変化からそのあり方や捉え方は変化せざるを得なかった。

本来、子どもたちの遊び場運動として始まったレクリエーション活動は強調性を養う集団活動としての機能と兼ねあわせ、学校や社会そして職場での集団活動を通して広がりを見せていった。だが、今日では、多様化する社会のなかで集団ではなく個性を重視することに重点が置かれていることから、レクリエーションが発展当初の青少年の健全育成を目的に、また集団活

動として用いられることはほとんど少なくなったといえる。一方で、急速に進む高齢社会への突入を向け、福祉分野での高齢者や障害を持った人を対象とする援助活動としての役割や内容が大きく注目されている。

レクリエーション運動が導入され、半世紀が過ぎようとしているが、レクリエーションが本来持つ意味合いは充分理解されないまま、活動やプログラム重視で行われている部分が多い。

どの時代にも見合う、対象やその目的をしっかりと捉えたレクリエーションを機能させていくためにも、レクリエーションを計画する側や行なう(参加する)側がその目的や内容などを認識してレクリエーションを行なう必要がある。

以上のようなレクリエーション運動のこれまでの流れや現在の捉え方をふまえ、本稿では、わが国のレクリエーション発展に最も影響を与えた北アメリカ(以下アメリカと記す)でのレクリエーション発展の経緯について、また現在のアメリカでのレクリエーション事情について考察するものとする。

II アメリカでのレクリエーション運動の発展

アメリカでのレクリエーション運動の発展にはこれまでに次の3つの側面が大きく影響を及ぼしてきた。ここではその3つの側面と、さらに著者が現代のアメリカの生活事情を鑑み、今日の社会問題としても重要な要素を占めるもう1の側面を取りあげて4つの側面からその影響について述べるものとする。そして、これらの側面をふまえてアメリカがレクリエーションというものをどのように捉えているのか考えていくことにする。

1. 社会改革運動としての側面

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ヨーロッパやアメリカでは産業革命後における都市化や産業の発達が発達化していった。貧困、非衛生、道徳の退廃、暴力の蔓延、青少年の非行

問題、環境の悪化が都市部を中心に社会問題として深刻化していったのである。

このようななかで、子どもたちの健全な成長や発達に欠かせない遊び場や空間の提供を行うことを目的にプレイグラウンド運動（砂場）が設置されることとなった。その後、対象を幼児から成人までに広げるとともに、健全なレクリエーションを提供することによって社会的コミュニケーションや隣人愛を深めること、また非行化や反社会的行動の防止、人間形成や関係作りを養成する手段としての機能を持つことでレクリエーション運動は人々の注目を集めることとなった。こうして、青少年教育から出発したレクリエーション運動が社会改良運動や社会福祉活動のひとつとして人々の生活や人格形成に強く影響を与えたのである。

2. 自然保護運動としての側面

アメリカの広大な敷地には世界でも有名な国立や国定などの公園と称されるものが数えきれないほどあり、その面積や数はわが国とは比べ物にならない。

レクリエーション運動は自然の中で自然資源を志向したレクリエーションの発展と密接に関係している。レクリエーションが運動として広まった発端がプレイグラウンド（遊び場）の設置であることもあり、野外での空間（場）というものをひときわ大切にしている。

アメリカで公園といえば、レクリエーションという言葉が出てくるほど、大なり小なり存在している公園はアメリカにとってレクリエーション発展に欠かせないものであった。

これを受けてレクリエーションを対象とした部局が行政の管轄のもと設置されることになった¹⁾。

アメリカでの自然保護運動の発端は、1626年にマサチューセッツ州プリモスに入植した移民団が、公的な承認を得ることなしに森林の伐採を禁止するという条例を成立させたことから始まる。ヨーロッパ全土から移民として渡って

きた移民団のまず最初の試みは、自らが生活していくために広大な大自然との闘いであった。その後、アメリカ全土に公有林の制定や森林地を確保するための予算の計上など、森林の需要と供給のバランスを保ち、公共用の建築物や造船のための用材の確保の目的のため、徐々に制度化されていった。そして、森林を確保しようとする姿勢が、その後のレクリエーション資源の保護という下地となっていったのである。

また、森林保護だけでなく、狩猟の規制も行い、全国的な自然保護運動への気運が国立公園の制度化へと発展し、それがひとつの重要な国家政策として位置づけられることになった。公園が単なる空間（場）として存在するだけでなく、そこに人々が集まり癒され、レクリエーション活動の楽しめる場として提供されていったのである。また、戦後、野外レクリエーションの需要が増大するなか、レクリエーション資源と整備はさらに進み、現在もそして今後も行政的課題として存続しているのである。

3. 商業娯楽運動としての側面

19世紀に始まった鉄道網の発達とともに、新しいレクリエーションの場が出現し、リゾートホテルなども建設されるようになっていった。ダンスホールやボウリング場、道化芝居や劇場鑑賞、スポーツ観戦など一般大衆が楽しめる場から高級リゾート地での避暑や観光旅行など、レクリエーションのあり方はさまざまな形態をみせていく。アメリカの人々の生活が安定していくのに伴い、商業基盤を目的としたレクリエーションが活発化していった。スポーツ観戦からの収益やこれまでは一部の上流階級だけが行なうスポーツとされてきたものが一般大衆にも手が届くものとされ、スポーツ用品の販売や玩具もふくめ、そこから生じる効果が影響を及ぼすこととなる。また、商業レクリエーションを特徴づけたものの大きなものに、テーマパークといわれる新しい遊園地の出現が挙げられる。テーマパークは従来の遊園地と呼ばれる乗

り物や見せ物、売店というものが設置されているというだけでなく、特定のテーマのもと、歴史や自然、芸術、科学を含め、来園者に何らかのメッセージ的なものを示す場所として効果を与えたのである。

今では、アメリカ国内だけでなく、世界にもその発展は広がっている。日本で開設されている東京ディズニーランド(現在は東京ディズニーリゾート(千葉県浦安市))やユニバーサルスタジオジャパン(大阪市此花区)などが代表的な場としてあげることができるだろう。

こうした商業レクリエーションの発展と開発の渦のなかで、重要なことは、商業開発だけに目を取られることなく、即座にレクリエーション資源の下地となる自然保護にも着手したことである。国立公園内での商業活動の一切の禁止や野外キャンプ場での利用者数の人数制限から持ち物の規制などを行なったのである。

また、自然保護としての商業レクリエーションが発展していくなかで、併せて健康にも重点をおき、健康とスポーツのあり方にも注目していった。この分野については次の4.で述べることにする。

4. 健康増進運動としての側面

現在のアメリカにおいて健康やスポーツ産業は、娯楽という楽しみだけでなく、人々が生きていくために考えていかなければならない、国家をあげて取り組むべき社会問題である。

20年前までは、フィットネスやウエルネスは、前項目である3.の商業娯楽運動のなかのひとつに含まれていた。しかし、年齢問わず肥満化が急速に進んでいるアメリカにおいて、今日、運動増進にむけてのプログラムの開発は国家をあげての課題であるといえよう。運動不足はもちろん、喫煙やアルコールからくる生活習慣病が深刻な社会問題となっているなか、健康づくり、体力づくりと併せて生活習慣を整えることが求められている。

ダンスホールやフィットネスクラブ施設の設

置や水泳、ジョギング、トレーニングジムやプログラム開発など、さまざまな展開をみせている。

フィットネスやウエルネスクラブには毎日大勢の市民が運動をすることを目的に訪れる。そう広くないスペースのなか簡単な運動を短時間で手軽に行なえるというもので、運動嫌いの人々にも愛用されている。また、最近では女性専用のフィットネスクラブも設けられ、対象を女性に絞り、女性が運動しやすい内観を形づくったり、特典などを設けて継続して活動が行えるように、商業としての基盤を設定しながら人々の生活習慣を整える方策が生み出されている²⁾。

以上のように、アメリカでのレクリエーション発展の側面には、自然保護から商業基盤まで、また生活習慣や生活環境を整えるといった人々が生活するうえで重要視すべき一貫したアメリカの姿勢が強く打ちだされている。

レクリエーションとは単なる活動の種目ではなく、地域社会のなかで住民のための公的サービスの一環として行なわれている大きな働きかけである。

そのために、公園・レクリエーションの管理運営には行政が責任を持って担うことが定められているのである。

ただ、これは、はじめは民間団体や市民活動がひとつの運動として広がりをもせたことが、公共的に必要と認められ、その後行政が介入し、社会のシステムとして位置づけられるようになった経緯がある。

わが国でも、レクリエーションの捉え方はさほどアメリカとかけ離れているとはいえない。しかし、同じように活動を行おうと試みても、生活習慣や面積の違いが大きすぎるため難しい面が多々ある。わが国での受け取り方がアメリカからの伝達時にどうしても表面的な捉え方しかできていなかったということに対しては、今後の課題として、今一度わが国での展開方法について考えていくことが求められている。

Ⅲ NRPA Congress & Exposition 2005 に参加して

筆者は2005年10月18日～22日の4泊5日の日程でアメリカ南東部に位置するサンアントニオで開かれた National Recreation Park Association（以下 NRPA と記す）Congress & Exposition に参加し、アメリカでのレクリエーション活動について、また現在のアメリカでのレクリエーションのあり方について考える機会を得た。以下にその報告と併せて、セッションや展示ブースの展示物などからアメリカ人のレクリエーションの意識についてやレクリエーションの重要性について述べることにする。

1. NRPA について

NRPA とは、アメリカにおける公園・レクリエーション運動の推進によって社会、文化、健康、経済などの各方面において、アメリカ市民に貢献することを目的として5つの団体が合併・統合された非営利組織（団体）の名称である³⁾。

NRPA の主な事業については以下に掲げる内容である。

①社会問題への啓蒙、対応事業

国家政策、地方政策、環境保全問題、高齢者問題、非行問題、障害者問題、人権問題、フィットネス・ウエルネス問題など、さまざまな社会問題解決に対して、公園、レクリエーションがいかに必要であるかを、連邦議会をはじめ地方議会に働きかけ、補助金の獲得などを通して社会にアピールしている。

②一般市民への啓発活動

さまざまなメディアを使い、一般市民に対する公園・レクリエーションの必要性を啓発している。

③専門指導者の能力開発

kongress の開発、大学課程認定プログラム、専門指導者認定プログラム、生涯学習プログラムを通じて、指導者の資質向上と能力開発



を行なっている。

④知識の蓄積

インターネット、国際協力、図書館の整備、出版活動などによって、資料、情報の収集、蓄積、あるいは情報の開示を行なっている。

一般的ではあるが、大きな事業内容のなかにも細かくその取り組みが述べられ、現実的な役割をさまざまな場面で行なっている。

また、NRPA Congress & Exposition は、NRPA 主導のもと全米の州、郡、都市の公園・レクリエーション部局で業務に従事している専門家や団体組織が年に一回集まる大会で、その他にも公園・レクリエーション施設の関係者や市民代表、軍のレクリエーション担当官などが参加をしている。

そこでは研究業績について発表を行なったり、レクリエーション団体や企業などがレクリ

エーション器具やプログラムなどの紹介を行なうレクリエーションのための一年に一回の大きなイベントである。

2. NAPA Congress Education Sessions (分科会)

会場であるサンアントニオのコンベンションセンター全館(4階建ての催し場と会議場に分かれて配置されている)は今回のNAPA Congress & Expositionの鮮やかな看板などで飾りつけられていた。そのNAPA Congressでの学会・分科会内容の種別について以下に列挙する。

- ・ Aquatics
- ・ Citizen Focus
- ・ Volunteerism
- ・ Collaborations
- ・ Diversity
- ・ Funding
- ・ Golf
- ・ Leisure Research Symposiums
- ・ Management
- ・ Natural Lands Management
- ・ Older Adults
- ・ Park Maintenance/Facility Management
- ・ Partnerships
- ・ Political Dynamics
- ・ Professional Development
- ・ Public Information
- ・ Recreation Programming
- ・ Student and Professional Preparation
- ・ Technology
- ・ Therapeutic Recreation
- ・ Urban Parks
- ・ Wellness

以上、22の種別ごとにわかれ、233のセッションと、このほか、9つのポスター発表が4日間の日程で行なわれた。研究発表や、教育的な分科会など、シンポジウム形式や発表者が一人

での発表形式とさまざまな形で行なわれていた。人数制限をする会場もあれば、途中から入れないようになっていたところもある。ほとんどの分科会では最初にアンケート用紙が配布され、途中での質問時間に質問する内容について記入したり感想を記入する形式になっていた。わが国でも人気が高いゴルフやマリンスポーツなど具体的なプログラム活動について取りあげているセッションは人気であったが、際立って満員だったセッションは、高齢者を対象とするプログラムや治療を目的とするものであり、どの国でも抱えている問題やレクリエーションに求めているものへの課題が同じであることを実感した。

3. NRPA Exposition のブースについて

分科会以上に目を見張ったものが、1階のホールにぎっしり設置された展示ブースの数とそのブースに集まっている人の多さである。

NRPAでの展示会での主なブース種別は以下の通りである。

- ・ Aquatics
- ・ Architects/Engineers
- ・ Arts/Crafts
- ・ Association/Society
- ・ Associations/Societies Products/Services
- ・ Athletic/Exercise Equipment
- ・ Bleachers/Seating
- ・ Buildings/Tents/Shelters
- ・ Climbing Walls
- ・ Communications
- ・ Computer Systems/Software
- ・ Concessions
- ・ Consultants
- ・ Education/Training
- ・ Facility Materials
- ・ Flooring/Athletic Surfaces
- ・ Golfing Products/Services
- ・ Grounds Maintenance
- ・ Ice Rinks



- ・ Lighting
- ・ Magazines/Publications
- ・ Maintenance Products/Services
- ・ Paints/Coatings
- ・ Park Products/Services
- ・ Playground Equipment
- ・ Promotional Products
- ・ Restrooms/Locker Rooms
- ・ Signs/Scoreboards
- ・ Skate Parks/Skate Ramps
- ・ Sports Equipment
- ・ Surfacing Materials
- ・ Swimming Pools
- ・ Turf Products
- ・ Uniforms
- ・ Waterfronts/Water Parks
- ・ Universities/Colleges

以上、36 の分野、1,157 もの展示ブース数が一堂に出展しており、ほぼ同数だけの企業や団体、組織の出展にその数の多さと種類には驚くものがあった。

スポーツ種目全般に関する用品（例えばボールなどの用具やユニフォームなど）や子どもが喜ぶ遊具、クラフト、野外でのテントやシェルター、道具類、出版関係、また、国内でレクリ

エーションカリキュラムが設置されている大学や専門学校を紹介するブースもずらりと勢ぞろいをしていた。また、コンピューターを展示しているブースでは、情報の発信や伝達方法の手段としてテレビやラジオなどのマスメディアを使用することなく、手軽に情報のやりとりができるものとして紹介されていた。

4. 出展展示場からの考察

スポーツ種目として行なわれているサッカーやバスケットボール、野球のボールやバットなどの用具がひと通り展示されているが、その隣のブースでは、バスケットボールのコート台やサッカーゴールのシュート台に出展者側も参加者側も視線が集まっていた。また競技場に設置されている座席や階段などが表側でなく後ろ側をメインにして展示されていた。何気なく通り過ぎると階段が後ろ向きに展示されていて、何の展示を行なっているのかわからない。これは、コート台や座席などの安定性について、また階段は滑り止めや幅などについて充分安全であり、危険はないということをアピールするもので、参加者側も入念に素材を確認し実際に何度も階段を上り下りしながら双方が対話をして

ある一帯には、色鮮やかなアスファルト製の



土が並ぶ。急速に増加している肥満化の問題が深刻な国家問題として取り出されているアメリカでは、健康増進のためにウォーキングやジョギングが活発に行なわれている。だが、運動することばかりを進めても、体重の負担がすべて足にかかってくる。無理にウォーキングやジョギングを行なったため、かえって病気になるといった問題も起こっている。

そのため、ウォーキングやジョギングを行なうにあたり足に負担のかからない、アスファルトの舗道の開発が行なわれている。各都市の公園のなかに、ウォーキングやジョギング用の、アスファルトで舗装された専用の道が設置されており、その道が一直線に続いている。できる限り足の負担をなくし、長時間ウォーキングやジョギングを行なっても無理なく行なえるというものである。

巨大な容器にチップが敷き詰められて展示されているブースがある。“さくら”や“かえで”などの葉のチップが身体に良いことや特に幼児がヨチヨチ歩きで歩いても軟らかく足に負担がない。転んで大きなケガになることもないため、公園などの子どもたちが遊ぶスペースにそのチップがぎっしり敷き詰められている。

また、前に述べた肥満化の問題と関連して規則正しい生活を送ること、生活習慣を整え環境を整えることは、今のアメリカにとっては重要で切実な問題である。それは、生まれたばかりの赤ちゃんからいえることであり、一番は食事の問題である。子どものときから栄養あるバランスある食事を規則正しく摂るといったことが家庭だけでなく学校でも取りあげられ、取り組



まれている。展示ブースでは食品会社が一日に平均摂取するべきカロリの一覧リストを手にししながら、食事やおやつ、特に乳幼児から就学期間に必要な食物の調理の仕方やカロリーメイトといわれる健康食品などを紹介していた。

5. その他

今回の訪米では、NRPA Congress & Exposition の参加だけでなく、西海岸のサンフランシスコで、高齢者の入所施設とデイサービスを提供している施設を見学した。

視察に訪れた高齢者施設は、キリスト教が設置主体として運営しており、生活水準が中準があるいはそれより少し高めの人が利用できる施設であった。わが国でいうところのグループホームの巨大版というべき、シニアハウスといった感じである。かなり安い入所料で入所ができることや居室は全室個室で、ホテルを感じさせる外観であった。

24 時間職員が常備待機しており、医師や看

護師もすぐに駆けつけることのできる体制であった。また、何より職員からの施設の説明でレクリエーションの充実が挙げられていた。ホワイトボードにはその日のレクリエーションプログラムが細かく記入されていた。利用者はそのプログラムを自由に選択できる。ほとんどがボランティアの協力で成り立っているが、その数の多さに驚いた。

その後、街を歩きながら、スラム街と言われている地域の真ん中にある小さな公園に行った。日中であつたがその公園には鍵がかかっており、なかには入ることはできなかった。

公園は犯罪や暴力が起きるのに一番格好の場所となる。本来は子どもが自由に遊ぶ場でありながら、反面危険性が高く子どもが巻き込まれ被害にあうことがかなり多い。そのため子どもが使用しない間は鍵をかけ、子どもたちが学校から帰ってきて、公園を使用する頃に、自治会の代表者が鍵を開錠し、遊び終わると施錠するというのである。わが国の公園と比較してもその面積は同じか狭いぐらいであり、アメリカにある数多くの公園から考えると信じられないほど小さな公園ではあるが、この地域にとっては大切な公園であり、子どもの遊び場である。ボランティアや自治会の人々の細かい配慮が街や地域がレクリエーション活動を支えていることを痛感した。

Ⅳ まとめ

アメリカには公的な機関として、「公園・レクリエーション」の行政機関が設置されている。

わが国で2分化されているものが、ひとつの機関として管理管轄を行なっているのである。その運営も、公共サービスの一環として、教育や福祉、保健機関など、公費で運営されるものが大部分であったり、民間組織が運営を行なっているものでも、かなりの公的資金が補助金として導入されている。また、レクリエーションと公園は一体となって考えられており、その運

営とプログラムの企画を行政機関がすべて担っている。行政機関で働く専門職を養成するために、さまざまな州の大学では養成課程が設置され、公園管理、運営管理、レクリエーションのプログラム支援、自然資源と野外レクリエーション、レクリエーション療法などの科目を履修することになっている。

アメリカは、多民族、多宗教という多様性のなかで成り立っており、そのなかで行われているレクリエーションには、さまざまな意味がこめられている。宗教や人種、国籍、学歴、年齢、性別、障害の有無にかかわらず、誰にも平等に与えられ行なえるものである。文化や宗教に捉われることなく、社会的問題の規制や権利の侵害から回避できる唯一の活動であり楽しみであるといえる。生活を快適に過ごし、また明日からも意欲的に生活を過ごすことができるためにも身近に誰にでも行なってもらいたいものとして、国民共通の理解の上になつて活動を行っていることが、これまでの発展の成果であるとともに今日も受け継がれているのである。

アメリカとわが国との文化の違いはかなり大きいにしても、わが国でも生活（衣食住）を重視する、密接に関わることのできるレクリエーション活動への取り組みが必要である。その上で、福祉分野での高齢者や障害を持った人を対象とするレクリエーションのあり方が重要な意味を持つことになる。制限された生活のなかでその人がいかに楽しく快適に過ごすことができるのか、レクリエーション活動が行えることは今以上に広がるに違いない。

その前には、考えていかなければならない問題点はいくつもある。

まずは、レクリエーション活動を支え、生活との関わりと結び付けていくレクリエーション指導者の問題が挙げられる。

前にも述べたがアメリカでは約100もの大学で、そのカリキュラムのなかにレクリエーション課程が組み入れられ、一定の単位を取得すると、その後、大学での単位とあわせて実技や筆

記の試験そして、審査を通して資格が取得できるのである。NRPAを中心にその指導者養成の認定制度が整っているのである。

カリキュラムの組み立てがいかに実践を重視し、その能力の高さにもアメリカのレクリエーション活動が誇れる部分であろう。

また、現在、社会福祉援助技術のひとつの方法であるグループワーク(集団援助技術)においてもわが国でグループワークが取り入れられた当初はその展開過程の中でレクリエーションは重要な役割を担っていた。現在では、グループワークの役割や対象においては、特別な目的で使用される場合が多くなっている。

今後、指導者養成についてやレクリエーション活動の構成について再度見直し、レクリエーション活動が身近に、幅広く活動が行えるような取り組みについて考えていくことが求められている。

レクリエーション活動とは難しいことではなく、児童を対象する場合、また障害を持っている人の症状にあわせて、また高齢者施設で行なう際の、対象や人数、場所や身体的・精神的側面を捉えて、誰にでも平等に楽しめるものである。そしてそこにプラス含めるべき点は、いかに生活と密着したものであるかが今日の大きな課題である。

アメリカの現在のレクリエーション事情を実際に目で見て体感したことで、わが国の意識とかなり違うことや国を挙げての取り組みの位置づけなどを知る良い機会を得ることとなった。

今後の課題として整理を行い、アメリカと同じというのではなく、わが国のできる取り組みについて考え、今後ますます需要の増えるレクリエーションのあり方について考えていくこととしたい。

注

- 1) 池田 勝 永吉宏英 西野 仁 原田宗彦著「レクリエーションの基礎倫理」杏林書院 p31 1994
自然保護運動は、アメリカで当時のセオドア

・ルーズベルト大統領の尽力によりひとつの重要な国家政策として位置づけられ、1916年内務省に国立公園局が設置された。「比類なき貴重な自然資源や史跡を子孫のために手つかずのまま保存すること」が目的とされた。

- 2) (財)社会経済生産性本部「レジャー白書2006」p118 2006

アメリカで誕生した女性専用フィットネスチェーン「カブス」は、楽しく会話をしながら30分程度で一通りの運動ができ、価格も従来の施設の半額程度という“コンビニ型フィットネス”といわれている。「機械が男性向け」「男性の目が気になる」「着替えが面倒」「会費が高い」といった中高年女性の不満に応えたサービスを行なっている。

- 3) 片岡敬一 滝沢富美子 横山 誠「アメリカにおけるレクリエーション事情」NRPA CONGRESS & EXPO 2004」及びアメリカ西部の公園、高齢者施設、コミュニティセンター視察報告『Leisure & Recreation 自由時間研究 第28号』p49 (財)日本レクリエーション協会 レジャー・レクリエーション研究所

NRPAの5つの統合・合併組織団体

- ①「National Recreation Association (NRA)」
全米レクリエーション協会
- ②「American Institute of Parks Executive (AIPE)」アメリカ公園管理協会
- ③「National Conference on State Parks (NCSP)」
全米州立公園協会
- ④「America Association Zoological Parks Aquariums (AAZPA)」アメリカ動物公園・水族館協会
- ⑤「America Recreation Society (ARS)」アメリカ・レクリエーション協会

参考文献

- 池田 勝 永吉宏英 西野 仁 原田宗彦著「レクリエーションの基礎理論」杏林書院 1994
一番ヶ瀬康子 藪田碩哉編 日本福祉文化学会監修「実践・福祉文化シリーズ第5巻 余暇と遊びの福祉文化」明石書店 2002
余暇問題研究所編「アメリカの公園・レクリエーション行政—その歴史的背景と事例研究—」不昧堂出版 1999
(財)日本レクリエーション協会 内田純平 坂田公信 田中祥子 藪田碩哉編「レジャー・カウンセリング LEISURE COUNSELING」大修館

一村小百合：アメリカにおけるレクリエーション運動の発展について

- 書店 2001
- (財)社会経済生産性本部「レジャー白書 2006」2006
- 一村小百合「社会福祉におけるレクリエーション
援助・活動の意義について」『関西福祉科学大学
紀要第8号』2004
- 一村小百合「余暇時間のあり方と福祉レクリエー
ション支援について－わが国の生活習慣と若者
のレクリエーションに対する意識から考える
－」『関西福祉科学大学紀要第9号』2005
- 一村小百合「組織キャンプとグループワーク～社
会状況の流れの中での変遷～」神戸女学院修士
論文 1999
- 「2005 NPRA Congress & Expositon」(San Antonio,
Texas) Program Book

